資料３

# 甕（かめ）

**＜概要＞**

**員　　数**　　１口

**法　　量**　　高さ 57.3cm、口径 34.5cm、胴径 56.8cm

**時　　代**　　鎌倉時代（13 世紀中葉（ちゅうよう））

平安時代末期（12 世紀）から鎌倉時代にかけて、知多半島では全域で無釉焼締陶器（むゆうやきしめとうき）の生産が展開した。甕は、主要生産器種の一つとして量産されている。製品は海に近い立地をいかして、東日本太平洋沿岸を中心に流通し、貯蔵や生産の容器として広く用いられていた。

本品は、半田市板山（いたやま）地区所在の古窯跡から出土したと伝えられる。肩部が強く屈曲して体部の輪郭は直線的な形状を呈し、赤褐色の器体に黄緑色の自然釉がかかって大きく流れている。中世常滑窯（とこなめよう）の甕として力強い形態と、自然釉の豊かな色彩を兼ね備えた、類例のない名品として、1950 年代から広く知られてきた。かつて本品は 14 世紀の所産と考えられてきたが、平成年間における編年（へんねん）研究(※)によって 13 世紀の所産と評価されるようになった。

---

(※)編年研究　考古学において、遺物や遺構の時間的な変化を分析、考察する研究。一般的に研究結果は編年表と呼ばれる、図面による年表として表現される。具体的な年代（実年代）は、年代や人名が記入された遺物等を参考として付与される。

甕

甕